アンナ・メアリー・ロバートソン・"グランマ"・モーゼス《アップル・バター作り》(部分) 1947年 個人蔵(ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託) ©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

静岡新聞社80周年・静岡放送70周年記念

Celebrating the 160th Anniversary of Her Birth

GRANDMA MOSES

A Retrospective Exhibition

生誕160年記念

グランマ・モーゼス展

素敵な100年人生

2021年9月14日(火)−11月7日(日)

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：太田・安岡 広報担当：大庭

静岡市美術館 〒420−0852 静岡市葵区紺屋町17−1葵タワー3F

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART tel. 054-273-1515(代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

静岡新聞社80周年・静岡放送70周年記念

生誕160年記念

グランマ・モーゼス展

素敵な100年人生

静岡新聞 SBS
清水銀行

■会　　期:2021年9月14日(火)－11月7日(日)【全48日間】

■休 館 日:毎週月曜日(ただし9月20日(月・祝)は開館)、9月21日(火)

■開館時間:10:00～19:00(入場は閉館の30分前まで)

■観 覧 料:一般1,300(1,100)円、大高生・70歳以上900(700)円、中学生以下無料

*(　)内は前売および当日に限り20名以上の団体料金　*障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

前売券:8月6日(金)から9月13日(月)まで販売

静岡市美術館、ローソンチケット、セブンチケット、チケットぴあ、谷島屋(パルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店)、MARUZEN & ジュンク堂書店新静岡店、大丸松坂屋友の会

主催:静岡市、静岡市美術館　指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送

後援:アメリカ大使館、静岡市教育委員会、静岡県教育委員会　　協力:ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク、日本航空

協賛:損保ジャパン、NISSHA　特別協賛:清水銀行　企画協力:東映

キュレーター:Jane Kallir(ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク ディレクター)　監修:千足伸行(成城大学名誉教授)

グランマ・モーゼスの愛称で親しまれる素朴派の画家、アンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼス(1860-1961)は、70代で本格的に絵筆を取り、101歳で亡くなる年まで1,600点以上の作品を遺しました。

モーゼスは、生涯をアメリカ北東部の農村で暮らした経験をもとに、四季の移ろいや日々の仕事、季節ごとの行事などを、豊かな色彩と素朴な筆致で詳細に描き出します。これらの絵が偶然、村を訪れたコレクターの目に留まった事をきっかけに、1940年、80歳の時にニューヨークの画廊で初個展を開きます。米国各地で展覧会を開催し、当時の大統領トルーマンより表彰を受けるなど国民的画家となってからも堅実な暮らしぶりは変わらず、日々を喜びに満ちたものにしようと生きた農村の人々の暮らしを描き続けました。

日本で開催される16年ぶりの回顧展となる本展では、最初期の油彩画から100歳で描いた絶筆、愛用品や関連資料など、日本初公開を含む約130点を紹介します。当時、大恐慌や戦争を経験し、疲弊していたアメリカの人々の心を捉えた作品は、今を生きる私たちにも温かく、力強いメッセージを投げかけてくることでしょう。

本展の見どころ

1. グランマ・モーゼスを紹介する、日本における16年ぶりの大回顧展!

グランマ・モーゼスは、当時の大統領らとの交流にはじまり、モーゼスを追ったドキュメンタリー映画がアカデミー賞にノミネートされるなど、存命中から圧倒的な知名度と人気を誇ったアメリカの国民的画家として知られています。その画業を支えたのは、モーゼスを世に送りだしたニューヨークの画廊主、オットー・カリアーでした。日本における16年ぶりの開催となる本展では最初期の油彩画から100歳で描いた絶筆、愛用品や関連資料など日本初公開作品を含む約130点を一同に展示します。

2. すべてが自給自足だった、"古き良き時代"の暮らしを体感!

モーゼスが生涯を過ごしたアメリカ北東部の村では、第2次世界大戦が終わった頃も、せっけんやろうそく、砂糖や衣類まですべて自分たちでつくる暮らしを送っていました。モーゼスの作品は自身の実体験に基づいたもので、当時の人々の生き生きとした営みを伝えてくれます。

3. グランマ・グランパ世代から小さな子どもまで楽しめる展覧会!

温かく親しみやすいモーゼスおばあちゃんの作品は、すべての世代を魅了します。会期中はグランマ・グランパ世代や、小さな子ども達に向けた様々な企画・イベントを開催します。

刺繍絵のステッチを思わせるピンク色の木花の表現
だまし絵のようにカーテンを配置した構図の作品

《窓ごしに見たフージック谷》(部分) 1946年　個人蔵(ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託)

日本
初公開

第1章　アンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼス

ANNA MARY ROBERTSON MOSES

グランマ・モーゼスのほとんどの作品は、ニューヨーク州とヴァーモント州にまたがる田園とその土地の人々の日常を描いたものです。モーゼスは、生涯を通じて暮らし、愛した身近な風景を変わることなく描き続けました。第1章ではモーゼスと縁のある場所や人生の転機となった作品、また絵画を始める前から得意とした刺繍絵などにより、モーゼスの人物像を紹介します。

絵を始める前に数多く制作した刺繍絵　リウマチの悪化で絵画へ

日本
初公開

《海辺のコテージ》1941年　個人蔵(ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託)

1913年にモーゼス家が初めて購入した自動車を描いた作品

《初めての自動車》1939年以前　個人蔵(ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託)

すべて　アンナ・メアリー・ロバートソン・"グランマ"・モーゼス　All Images ©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

灰汁に古油を加えたものを煮つめてせっけん作り
せっけんで洗い刈り取った羊の毛で、様々な衣類が作られる

《5月：せっけんを作り、羊を洗う》1945年　ミス・ポーターズ・スクール、ファーミントン、コネチカット（レイモンド・F・エヴァンス夫人による寄贈）

第2章　仕事と幸せと

WORK AND HAPPINESS

モーゼスの絵は、当時の人々がすべて自分たちで作る暮らしを送っていた事を伝えてくれます。せっけん、ろうそく作り、作物の収穫、"蜂"のように集ってキルトを作り食事するキルティング・ビー。こうした仕事は、多くの人が集まり、仲間意識を育む楽しい機会でもありました。それは、結婚式や引っ越しを手伝うといった地域の行事にも現れます。第2章ではモーゼスが描く家族や村の人々との素朴な日常の暮らしを紹介します。

日本
初公開

《1800年のろうそく作り》1950年
個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

日本
初公開

《村の結婚式》1951年　ベニントン美術館

《キルティング・ビー》1950年　個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

すべて　アンナ・メアリー・ロバートソン・"グランマ"・モーゼス　All Images ©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

《魔女》1960年　個人蔵（グランマ・モーゼス・プロパティーズ、ニューヨーク寄託）

秋
ハロウィーン

豊作を祈り、悪霊や魔女を追い払うために仮装
この日ばかりは多少のいたずらも許される

第3章　季節ごとのお祝い

SEASON'S CELEBRATION

モーゼスは農村の暮らしについて、“毎日ほとんど変化がないけれど、季節だけは移ろう”と語っています。だからこそ、村の人々は四季の微妙な変化を大切にし、季節ごとの特別な行事を楽しみました。2月にはメープルの樹液を採取してシロップと砂糖を作るシュガリング・オフ、夏にはピクニック、晩夏から初秋にかけてはアップルサイダー（リンゴ果汁）とリンゴを煮てバター状にするアップル・バター作り。そして、秋と冬にはハロウィーンや感謝祭、クリスマスと続きます。

冬
クリスマス

《来年までさようなら》1960年　個人蔵（グランマ・モーゼス・プロパティーズ、ニューヨーク寄託）

秋
感謝祭

感謝祭のごちそうのシンボル、七面鳥をつかまえる

《七面鳥を追いかけて》（部分）1940年
個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

雑誌の挿絵や写真を
参考に、人や動物を
どの様に描くか研究

モーゼスが参照した雑誌の写真　個人蔵（グランマ・モーゼス・プロパティーズ、ニューヨーク寄託）

冬
樹液の採取

日本
初公開

《シュガリング・オフ》（部分）1955年　個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

すべて　アンナ・メアリー・ロバートソン・"グランマ"・モーゼス　All Images©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

100歳の絶筆

《虹》1961年 個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

第4章 美しき世界

BEAUTIFUL WORLD

モーゼスの絵で最も大切なテーマは、変わらない自然の美しさです。自然は過酷な仕打ちをすることもある、けれども人間が理解と敬意をもって接すれば恵みを与えてくれるのだと、モーゼスは知っていました。モーゼスはその静と動どちらにも敬意を表し、目の前に映る風景を捉えました。第4章では自然を主題にした作品、そして100歳で描き絶筆となった《虹》を紹介します。

《美しき世界》1948年 個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

《雪雨》1948年 個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

《森の火事》1945年 個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

すべて　アンナ・メアリー・ロバートソン・"グランマ"・モーゼス　All Images©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

愛用品・資料
Favorites and Documents

モーゼスが描いた作品以外にも、彼女のお気に入りや手作りのものなど、プライベートを垣間見ることができる品々のほか、モーゼスの偉業や当時の影響力を示す資料など約50点を併せて展示します。

日本初公開

《手作りのキルト》1961年以前　ベニントン美術館

日本初公開

モーゼスが絵画制作の作業台として使っていたテーブル。両脇の支えの板にはモーゼスによる風景画がほどこされている。

《絵を描くための作業テーブル》1773年-1920年　ベニントン美術館

日本初公開

《孫娘のために作った人形》 1932年
ベニントン美術館(ゾイン・コロセウスとフランセス・ルドゥウィグによる寄贈)
すべて　アンナ・メアリー・ロバートソン・"グランマ"・モーゼス
All Images©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

関連イベント

グランマ・グランパ世代から小さな子ども達まで楽しめる、様々なイベントを開催予定！

専門家を招いての講演会、担当学芸員による一般・親子向けスライドトーク、2歳以上の未就学児対象「しずびチビッこプログラム」のほか、グランマ・グランパ世代に向けたプレゼント企画などを計画中。詳しくは当館HPをご覧ください。

“Life is what we make it, always has been, always will be.”

人生は自分で作りあげるもの。これまでも、これからも。── グランマ・モーゼス

写真：Otto Kallir©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

Anna Mary Robertson Moses

アンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼス

（1860年9月7日ニューヨーク州グリニッチ生まれ）

人生の大半を農家の主婦として家庭を切り盛りしてきたが、70代になりリウマチの悪化で得意の刺繍絵が上手くいかなくなり、絵筆を手に作品を描き始める。ニュー・イングランドの自然や農村の暮らしを素朴な筆致で描いた作品は地元のドラッグストアに飾られ、偶然、村を訪れたルイス・J・カルドア（エンジニア、アマチュアコレクター）の目にとまる。ニューヨーク近代美術館メンバーズ・ルームでのグループ展を経て、ニューヨークの画廊、ギャラリー・セント・エティエンヌで初個展が開催されると、一躍人気画家となる。モーゼスが80歳の時のことだった。グランマ・モーゼス（モーゼスおばあちゃん）との愛称により国内外で作品が展示され、大統領から表彰を受けるなど著名になってからも、堅実な暮らしを守り、101歳で亡くなる年まで1,600点以上の作品を描き続けた。

A Brief Chronological Table of Grandma Moses

グランマ・モーゼス略年譜

1860年　9月7日
ニューヨーク州の農夫の家に、
10人兄弟の3番目として生まれる。

1872年　12歳
近くの農家へ奉公に出る。

1887年　27歳
トーマス・サイモン・モーゼスと結婚後、
ヴァージニア州へ移住し農業を営む。
10人の子供のうち、
5人が生まれてまもなく死去。

1905年　45歳
一家はニューヨーク州に戻り、
イーグル・ブリッジに農園を購入する。

1927年　67歳
1月15日、夫トーマス死去。

1932年　72歳
バーモント州ベニントンに渡り、
病気がちな娘アンナと孫の世話をする。

©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

©2021, Grandma Moses Properties Co., NY

1935年　75歳
イーグル・ブリッジに戻る。
リウマチのリハビリを兼ねて、
趣味で絵を描きはじめる。

1938年　78歳
村のドラッグストアに飾られていた作品が、エンジニアで
アマチュアコレクターのルイス・J・カルドアの目にとまる。
10枚の絵が購入される。

1940年　80歳
ニューヨークの画廊、ギャラリー・セント・エティエンヌで初の個展。
以降アメリカ国内各地で開催。 好評を博す。

1960年　100歳
100歳を祝ってニューヨーク州知事が
モーゼスの誕生日9月7日を
「グランマ・モーゼスの日」に制定。

1961年　101歳
フージック・フォールズの
ヘルスセンターに入院する。
12月13日永眠。

『タイム』1953年12月28日号
個人蔵（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク寄託）

日本の皆さまへ　ジェーン・カリアー（ギャラリー・セント・エティエンヌ、ニューヨーク　ディレクター）

グランマ・モーゼス（1860-1961）は20世紀の半ばにアメリカで最も有名で成功をおさめたアーティストのひとりです。彼女の描く風景は、当時、第2次世界大戦で味わった恐怖と東西冷戦がまさに始まろうという不安にさいなまれた人々の気持ちを癒し、元気をあたえるものでした。モーゼスの名声は彼女の存命中にヨーロッパへも響き渡りましたが、日本で広く知られるようになったのは1980年代になってからのことでした。アメリカやヨーロッパと同様に、グランマ・モーゼスは日本でも温かく受け入れられました。それは、智慧とは長い人生のなかで培われるもの、また、自然との調和をもって生きることが必要、といった彼女の考えに日本人の価値観が共鳴したからです。

この展覧会は日本でのグランマ・モーゼスの個展としては2005年以来16年ぶりに開催されるものです。世界がふたたび大きな動揺に見舞われている今だからこそ、モーゼスからの励ましが必要とされています。今回、希望の思いを込めて、日本の展覧会のためにグランマ・モーゼスを象徴する代表作をいくつも選びました。グランマ・モーゼスのいう“美しき世界”は、どこに目を向ければよいか知ってさえいれば見つけられる、と固く信じて。

photo by Julienne Schaer

俳優、吉岡秀隆さんが音声ガイドをつとめます。

©須田卓馬

モーゼスおばあちゃんの紡いだ絵の世界や作品の見どころを、吉岡秀隆さんのナレーションで丁寧に紹介いたします。さらに、スペシャルトラックにはタレント・結城アンナさん（本展公式サポーター）が登場します。

［貸出価格］　お一人様1台600円（税込）

吉岡秀隆

『八つ墓村』（1977年／野村芳太郎監督）で映画初出演。その後、『遙かなる山の呼び声』（1980年）で、山田洋次監督に見出され、『男はつらいよ　浪花の恋の寅次郎』（1981年）以降のシリーズにレギュラー出演。2019年、『男はつらいよ　お帰り　寅さん』が、22年ぶりに公開された。映画『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズ三部作（2005～2012年／山崎貴監督）に主演し、日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を二度受賞。テレビドラマでは「北の国から」シリーズ（1981年～2002年）、「Dr. コトー診療所」シリーズ（2003年～2006年）等に出演。近作では、NHKBSドラマ「悪魔が来りて笛を吹く」（2018年）、「八つ墓村」（2019年）で金田一耕助に挑む。山で暮らす夫婦の25年を追ったドキュメンタリー映画『ふたりの桃源郷』（2016年）では語りを務めた。

結城アンナさんが、公式サポーターに就任しました！

© Chiemi Nakajima

グランマ・モーゼスの絵を見ると、突然穏やかな気持ちになります。まるでモーゼスおばあちゃんが、私に語りかけるように感じるのです。メッセージには優しさと安心感があります。“この世界は良いところです”“すべて大丈夫よ。あなたの周りのすべての美しいものを見て、今を楽しんでください”と。

私たちの世界が未知の領域にめまぐるしく移り変わる今、同じペースを保ってぶれずに生きることはとても難しいです。農家の仕事、家族、コミュニティを中心としたシンプルな暮らしや自然の無敵の美しさといった、今も変わらないノスタルジックなテーマのグランマ・モーゼス展ほど、時代に沿った展覧会はないでしょう。まして、このアーティストが女性であり、おばあちゃんであり、自分の持って生まれた運命を受け入れ、あきらめなかった人だと知ることで、さらに心が強く動かされ魅了されるのです。

結城アンナ

1955 年スウェーデン生まれ。10 代からファッション誌・CMなどでモデルとして活躍。俳優・岩城滉一と結婚後は、夫妻でCM・テレビ番組などにも出演。60 歳を迎えてから、本格的に芸能活動を再開。現在は、自身のファッションやポジティブ・エイジングなライフスタイルに注目が集まり、幅広い分野で活躍中。著書に『自分をいたわる暮らしごと』（主婦と生活社、2017年）ほか。

世界的ピアニスト、辻井伸行さんとの楽曲タイアップが決定しました。

© Yuji Hori

展覧会公式テーマ曲　「金髪のジェニー」

演奏：辻井伸行（ピアノ）　作曲：スティーブン・フォスター

タイアップ曲はアメリカ民謡の父とも呼ばれる作曲家スティーブン・フォスター作の「黄金のジェニー」。日本では『トム・ソーヤ―の冒険』（世界名作劇場、1980年放映）で「ケンタッキーの我が家」とともに挿入歌として使用されたことでも知られています。辻井伸行さんの名演奏とグランマ・モーゼスの世界はどのようなハーモニーを奏でるのでしょう。どうぞご期待ください。

辻井伸行

2009年6月、「第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール」で日本人として初優勝して以来、国際的に活躍している。ニューヨークのカーネギーホールの主催公演、イギリス最大の音楽祭「プロムス」へのBBCフィルとの出演、ウィーン楽友協会やベルリン・フィルハーモニー、パリのシャンゼリゼ劇場などの世界の著名なホールでの演奏会はいずれも絶賛され、ゲルギエフやアシュケナージなどの世界的指揮者との共演も常に高い評価を受けている。CDも積極的に発表し、2度の日本ゴールドディスク大賞を受賞。作曲家としても高い人気を誇り、映画《神様のカルテ》で「第21回日本映画批評家大賞」を受賞したほか、数多くの映画やドラマのテーマ曲を手掛けている。